

はじめに

まず、本書の名前であるが、「江戸東京の……」であって、江戸と東京の間に・は入れてない。私は今までも・を入れないで、江戸東京の野菜を述べてきた。

他書には「江戸・東京の……」と言う、題名の本があって、・の有る無について訊ねられたことがあったが、・のないのは江戸と東京が続いていて、徳川幕府と明治政府は明らかに別ものであるが、江戸の庶民の生活や作られた野菜は区切りが有るわけではなく、実際に江戸の生活は日露戦争（1904～05）頃まで、殆ど江戸時代と暮らしは変わらなかったと亡祖母（安改の生まれ [1854～59]）は回顧していたし、私の調べでも同様であった。従って、江戸東京と引き続いているものであって、野菜栽培には何ら線を引く区切りのないものである。

江戸と書くと何か漠然としていて、掴めないところがあるが、本書の江戸は幕府の町奉行所の管轄、所謂「朱引き内」を意味して、野菜の産地は当時の輸送条件などで、朱引き中心の江戸城から、東西南北3～4里（12～16 km）までの、近郊地帯を意味する。もっともこれも厳格に線を引けないので、「江戸府内とは、町屋の続く限り」など苦しい答弁を当時の幕府の老中では陳べている。因みに南は東京湾の海なので、寿司屋の暖簾「江戸前」と書かれているのである。江戸のすぐ前の海で採れた、魚介類を意味する。野菜は「近在物」と称されて、輸送の発達するまで使われたが、現在は殆ど死語に近い。

行政区画からみると、明治4年（1871）廃藩置県により、東京府が置かれた。本書で述べる範囲は、この時の東京府の範囲に該当する。従ってその後東京府に移管された「伊豆七島」さらに移管された「小笠原諸島」、明治26年（1893）に移管された西・北・南の3多摩地方は含まない地域を、江戸の近郊地帯としているのである。もっともこれは私が独断で定めたもので、私が「江戸東京の野菜……」と私家版で纏めているものだけの適用であるので、他より抗議されることはあるまいと思う。

この区域は昭和7年（1932）に隣接の5郡82町村を統合して、35区の東京市が生まれ、その後、第2次世界大戦を経て、この地域の住民に新鮮な野菜を供給してきたのである。

時代の移りと共に、東京に全国より人々は移入して、都市化とともにこれらの農耕地帯も減少しつつあって、昔日の面影のない地帯となり、縁あって私のライフワークとして江戸東京の野菜を纏めているのである。

おわりに

江戸東京の野菜についてあれこれ私家版として、何冊かを出版して図書館など要路に寄付してきた。最近の電子機器の発達は、私家版でもカラーを使えるようになったので、本書ではカラー版としたのである。

はじめに述べたように、縁あってこの仕事をライフワークとしている理由について、少しばかり述べてみたい。

私は東京生まれの東京育ちである。しかし「江戸っ子」ではない。私の先祖は浅草あたりに住んで居たが、その始めは何時とは？全く不明である、一庶民の歴史など、伝承でもなければ記録などありようがないからである。戸籍は明治以降のものである。

祖父は狩野派の画家で、仏閣などの障壁画や天井画を描いていたが、その作品も関東大震災(1923)と、東京大空襲(1945)で灰塵となり、亡母によると「最後に残っていた、芝の増上寺の絵も空襲で焼けて無いし、実家の火事で手元のものも皆焼けて、何も残っていないのが、寂しい。」と述べていた。浅草辺りの親戚も、関東大震災と東京大空で散り散りなり現在浅草辺りには親戚は皆無になったが、私の菩提寺は引き続いて、浅草から関東大震災で移転した葛飾にあるお寺である。何時ごろのことか、私は知らないが、亡母の実家は火事に焼け出されて、神田川の「面影橋」の近くの「砂利場村」に居を定め、私の育ったのもその付近であった。だから「江戸っ子」ではないのである。

その私が農学を学び、「開拓地常駐営農指導員」から「東京都農業改良普及員」になったのは、朝鮮戦争最中の昭和25年(1950)の秋であった。

その後退職する昭和59年(1984)まで、その間伊豆「大島支庁」管内の、農業指導の4年余りを除いて、江戸西郊の新宿・中野・杉並・世田谷・目黒・大田・練馬・板橋・北の各区と江戸東郊で、葛西・江東(この江は隅田川)の、江戸川・葛飾・足立の周辺の区部の野菜指導にそれぞれ15年づつ従事したのである。もとより一介の現場の指導員であって、学究の徒ではないので、江戸時代の野菜については、まだまだ明治生まれの古老が現役であった頃の見解が貴重な材料となっている。また昭和33年(1958)の国立平塚園芸試験場の3月間の野菜研修と、昭和48年(1973)の東京教育大学農学部園芸教室の1年間の野菜研修の内地留学は、実地から離れて、学究として貴重な勉学であった。殊に井上頼数博士は終生の恩師であった。先生の蔵書の自由閲覧や貴重な文献を戴いたことは、その後の私の「江戸東京の野菜」の記録に大変役だったのである。またまだ若造の私に、面倒がらずに江戸からの野菜の話しをしてくれた、多くの農家の人々に感謝し、冥福を祈るものである。